

# 大学生のインターネット利用と行動圏との関係

—地方都市の郊外キャンパスに通う工学部の学生を対象として—

○伊丹絵美子\*<sup>1</sup> 垂水浩幸\*<sup>2</sup>  
小林一智\*<sup>3</sup> 中島美登子\*<sup>4</sup>

キーワード：行動圏 インターネット利用 大学生

## 1. はじめに

近年、「ネット依存」といった言葉とともに、インターネット（以下、ネット）利用に多くの時間を費やし、現実空間での生活がままならなくなったり、ひきこもり状態に陥った人々がメディアにも取り上げられている。ネット利用に時間を消費することや買い物など従来は現実空間で行っていた行為がネット上で代替が可能になったことなどから、ネットは利用者の現実空間での外出の頻度を減らしたり、その地理的な行動圏を縮小させる効果を持つと考えられる。一方、ネットによる情報入手の容易化や大量化、レストランの予約など現実空間での行為への補助などにより、ネット利用が人々の外出行動を活発にし、その行動圏を拡大させる効果も期待される。この相反するネット利用による日常的な外出やその行動圏への影響は、次章で示すように複数の関連研究により示唆されているものの、十分には検証されていない。

本稿は、ネット利用と行動圏の関係について地方都市の郊外キャンパスに通う大学生を対象に検証することを目的とする事例研究である。

## 2. 関連研究

ネット利用が閉じこもり、つまり外出の減少につながることは、特にオンラインゲームによるネット依存に関する書籍<sup>1) 2)</sup>における言説がある。また、平井ら<sup>3)</sup>はオンラインゲームの利用によるひきこもり・不登校への影響を心理的側面から示している。

一方、高木・藤井<sup>4)</sup>はネットにより目的地を調べることのある人の利用する場所がない人が利用する場所に比べて地理的に遠いことを実証し、ネット利用が行動圏を広げる可能性を示唆している。また、遠藤<sup>5)</sup>はパソコンによるネットを使うようになって行動範囲が広がったとの認識する青少年が一定数存在することを示している。以上のように、ネット利用による外出行動・行動圏に対する相反する効果が報告される背景には、ネットの利用方法の多様性や個人属性の違いがあると考えられる。そのため、その相互関係や因果関係を明らかにするためには、それらの違いを勘案した実証研究が必要だと考えられる。本稿はその第一歩として、ネット以外の影響要因やネット利用の程度を勘案し、ネット利用と行動圏との

関係を探るものである。なお、本稿の一部は速報として文献6~8にて報告している。

## 3. 研究方法と調査概要

### 3.1 研究方法

調査方法は地方都市T市にある郊外キャンパスに通う工学部の学生に対する質問紙調査（表1）と聞き取り調査（表2）である。質問紙調査の結果を用いて、実際の生活行動圏とネットの利用程度との相互関係を第4章に示す。生活行動圏とは日常生活上訪れる地理的な広がりとし、本稿では便宜的に月に1回以上の頻度で行く場所（以下、よく行く場所）に着目する。聞き取り調査の結果を用いてネット利用による行動圏とそれに影響を与える生活上の変化の認識を第5章に示す。生活上の変化に着目したのは、ネット利用は直接的に行動圏に影響するだけではなく、生活上の変化を介して間接的に影響を与えうると考えたためである。

T市は、人口約42万人の中核都市で県庁所在地である。工学部キャンパスは、T市の市街地から約6km南の郊外部に位置する。鉄道駅まで遠いこともあり、多くの学生は自転車等の公共交通機関以外の交通手段を持つ。県立図書館や企業の研究施設のあるインテリジェントパークに隣接するものの、周辺には田畑が多く残り、地域施設は1km弱離れた幹線道路沿いに立ち並ぶ。サークル活

表1 質問紙調査の概要

□調査対象:	地方都市の郊外キャンパスに通う工学部の学生2・3年生
□実施日時:	2010年10月
□実施方法:	授業の際に本研究の目的を示した調査票(用紙)を配布し、20分間での回答を求めた
□調査項目:	①ネットの利用状況:利用頻度、平日・休日の利用時間、ネット・サービスの利用状況、ネット上の交流 ②よく行く場所(月に1回以上)の利用状況:立地 <sup>1)</sup> 、用途、目的、きっかけ、利用頻度、交流 ③回答者属性:自宅の立地 <sup>1)</sup> 、主たる交通手段、性別、学年、学科
□回答者数:	235人

1)よく行く場所や自宅の立地は、回答者に地図上にプロットを求めた。

表2 聞き取り調査の概要

□調査対象:	地方都市の郊外キャンパスに通う工学部の学生3年生
□実施日時:	2011年9~10月
□実施方法:	事前に調査用紙への記入を求め、それをもとに30分~1時間/人で聞き取りを行った
□調査項目:	アンケート調査調査項目に加え、ネットや場所の使い方、ネット利用による生活行動の変化の認識の理由について詳細に尋ねた
□回答者数:	20人

動や1年生対象の教養科目の講義・演習がT市の市街地に位置する本部キャンパスで行われるため、本部キャンパスに行き来する学生や市街地に下宿する学生もいる。

### 3.3 質問紙調査の回答者の分析対象の抽出

性別、学科、居住地、住まい方、交通手段としての車利用の有無といった回答者属性は行動圏に影響を与える可能性がある。そのため、全235名の回答からこれらの回答者属性と行動圏との関係を探り、ネット利用以外の影響要因を除いた分析対象を抽出した。行動圏の指標として生活行動圏を示唆するよく行く場所の数、平均距離、最遠距離を用いる。これらの3指標と5つの回答者属性との間で相関分析を行った結果、性別および学科は行動圏の3指標すべてに対して相関はみられなかった。一方、居住地、住まい方、車の有無の3属性は、平均距離および最遠距離との間に有意な相関がみられた。T市外在住、実家住まい、車が有る回答者の方が平均距離・最遠距離が有意に長い。また、これらの3属性は互いに相関がある。この3属性の影響を受けない回答者の抽出のために、まず、有意に平均・最遠距離が大きくサンプル数の少ないT市外在住の回答者を除いた。そして、T市在住の回答者199名を対象に住まい方による生活行動圏の差を検定すると、実家住まいの方が有意に平均距離、最遠距離が大きい。そこで、実家住まいを除きT市在住の下宿生159名を対象に主な交通手段としての車の有無による生活行動圏の差をみると、車の有無の影響が見られなかった。そこで本稿では、T市在住の下宿生159名から最遠距離が突出して長い1名を除き、さらに次節で述べるネット利用度の算定項目に欠損値がある回答者1名を除いた157名を分析対象とする。表3に分析対象となる回答者の属性を示す。

### 3.4 ネット利用度の定義と質問紙回答者の分類

本稿では、ネット利用の程度を示すために、平日の利用時間、休日の利用時間<sup>注1)</sup>、継続利用しているネットサービス数<sup>注2)</sup>、情報発信することのあるネットサービス数<sup>注3)</sup>の4項目に着目する。これらは、ネット利用における時間、サービス利用の多様性および双方向性を示唆するものといえる。両調査においてネット利用を「パソコンや携帯電話によるもの」と示しており、デスクトップ型パソコンだけではなく、ノート型パソコンや携帯電話といったモバイル機器も含めたネット利用についての回答が得られたと考えられる<sup>注4)</sup>。分析対象者のネット利用状況を図2と表4に示す。そして、4項目をそれぞれ平均0、標準偏差1として基準化し、それらを合算したものをネット利用度とする。なお、4項目は統計上有意味な相関がある。欠損値のある1名を除いた157名のネット利用度別の回答者数を図3に示す。本稿ではネット利用度を回答者数が等しくなるように3分割し、数値の低いもの、つまり利用の程度が低いものからL群、M群、H群

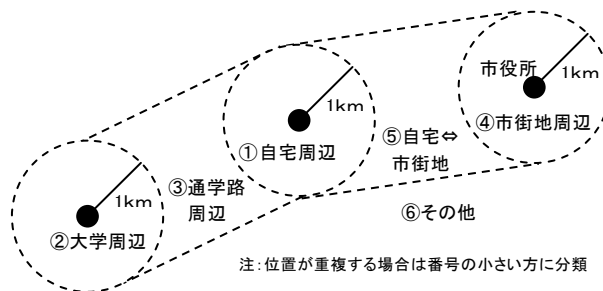


図1 自宅・大学・市街地との位置関係

表3 質問紙調査の分析対象者の属性

性別		車		学科	
男性	139 (89%)	有	29 (18%)	建設系	60 (38%)
女性	18 (12%)	無	128 (82%)	情報電子系	49 (31%)
				機械系	30 (19%)
				材料系	17 (11%)
				不明	1 (0.6%)

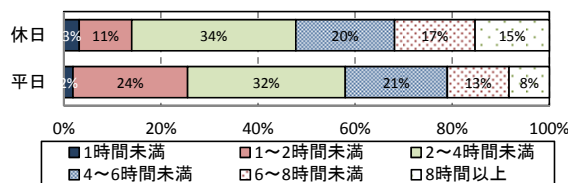


図2 分析対象者のネット利用時間 (N=157)

表4 分析対象者のネットサービスの利用状況 (N=157)

サービス名	継続利用者数	発信者数
チャット	58(37%)	-
マイクロブログ	30(19%)	30(19%)
ブログ	42(27%)	37(24%)
SNS	95(61%)	73(46%)
掲示板	61(39%)	23(15%)
口コミ情報サイト	68(43%)	10(6%)
オンラインショッピング	94(60%)	18(11%)
オンライン予約サイト	28(18%)	-
動画配信サイト	144(92%)	16(10%)
オンラインゲーム	62(39%)	-

注)「-」は利用に発信が伴うサービスであるため、質問から除いた項目を示す。

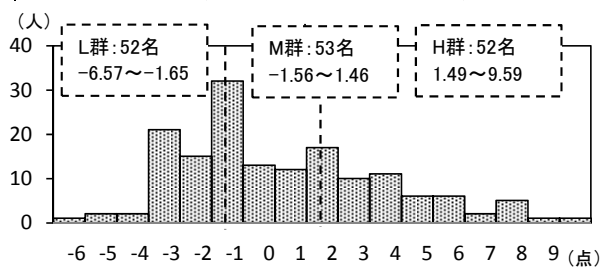


図3 ネット利用度別の回答者数

群と便宜的に分類した。

## 4. ネット利用度別にみた生活行動圏

ここでは、質問紙調結果を用いて、T市在住の下宿生157名を対象に、ネット利用度別に回答者の生活行動圏について考察を行う。本章の図表の( )内の数字は、該当する回答者数を示す。

### 4.1 よく行く場所の数と自宅からの距離

各回答者によりあげられたよく行く場所数の平均値は、M群(2.4ヶ所)、L群(1.9ヶ所)、H群(1.8ヶ所)の順で高いが、統計上有意味な差は確認できなかった。表5に示すように、自宅からのよく行く場所への平均距離は、M群、L群、H群の順で大きい。最も大きいM群と最

も小さいH群の間には有意傾向がみられた。また、表6に示すように、自宅から最も離れたよく行く場所への距離も、M群、L群、H群の順で高い。最も距離の遠いM群はH群に対して統計上有意な差があることが確認された。

#### 4.2 自宅・大学・市街地との位置関係

回答者は平日はほぼ毎日大学に通学しているため、自宅周辺・大学周辺・通学路は、本人の活動の活発さによらず日常的に行動する範囲といえる。この範囲だけにしかよく行く場所がない回答者は、比較的生活行動圏が狭いといえる。そこで、各回答者のあげたよく行く場所の中に、自宅・大学・通学路以外に立地する場所があるかどうかに着目する。図4に示すように、M群(約79%)、L群(約70%)、H群(約63%)の順で、自宅周辺・大学周辺・通学路以外に立地するよく行く場所をもつ回答者の割合が高い。独立性の検定の結果、最も多いM群と最も少ないH群に対して有意傾向が確認された( $\chi^2$ 値2.72, p値0.099)。以上のことから、M群の回答者はH群よりも自宅から遠い場所によく行く、つまり、生活行動圏が大きい傾向がある可能性が確認された。

#### 4.3 よく行く場所の施設用途

ネット利用度により生活行動圏が異なる背景を探るため、よく行く場所の施設用途に着目する。表7に各施設用途の場所までの平均距離と、ネット利用度別に当該施設用途の場所を選択した回答者数とその割合を示す。自宅からの平均距離が比較的大きい専門小売店(約2.0km)を、M群の約62%の回答者があげており、その割合は他の2群よりも約30%高い。これは、M群の生活行動圏が比較的大きい一因と考えられる。一方、自宅からの平均距離が比較的大きいアルバイト・サークル先(約2.6km)を、H群の約12%の回答者しかあげておらず、他の2群よりも約11%低い。これは、H群の生活行動圏は比較的小さい一因と考えられる。

#### 5. ネット利用による行動圏の変化に対する認識

表5 ネット利用度別にみたよく行く場所の平均距離

ネット利用度	平均値(km)	差の検定	t値	p値(両側)
L群(33)	1.80	L群とM群	-0.69	.494
M群(28)	2.02	L群とH群	1.21	.232
H群(26)	1.45	M群とH群	1.83	.072

表6 ネット利用度別にみたよく行く場所の最遠距離

ネット利用度	平均値(km)	差の検定	t値	p値(両側)
L群(33)	2.64	L群とM群	-1.52	0.134
M群(28)	3.32	L群とH群	0.94	0.350
H群(26)	2.21	M群とH群	2.47	0.017*

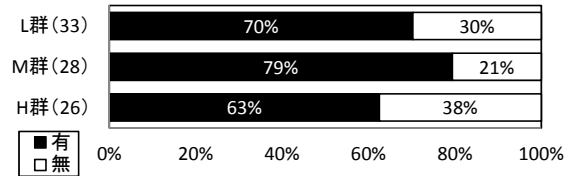


図4 ネット利用度別にみた自宅周辺・大学周辺・通学路以外に立地するよく行く場所の有無

表7 ネット利用度別にみたよく行く場所の施設用途 (M.A.)

	平均距離(km)	L群(52)	M群(53)	H群(52)
専門小売店	2.01	16 (31%)	33 (62%)	15 (29%)
飲食店	1.92	15 (29%)	25 (47%)	18 (35%)
スーパーマーケット	0.82	17 (33%)	15 (28%)	22 (42%)
娯楽施設	2.81	16 (31%)	17 (32%)	12 (23%)
アルバイト・サークル	2.59	12 (23%)	12 (23%)	6 (12%)
ショッピングセンター	1.76	10 (19%)	9 (17%)	7 (13%)
コンビニエンスストア	1.19	5 (10%)	7 (13%)	12 (23%)
その他	3.24	9 (17%)	11 (21%)	3 (6%)

ここでは、聞き取り調査結果をもとに、ネット利用による行動圏および行動圏に影響を与える生活上の変化に対する認識について述べる。聞き取り調査では行動圏として、先述のよく行く場所からなる生活行動圏に加え、たまに行く場所も含む行動圏(以下、包括行動圏)についても尋ねた。行動圏に影響を与える生活上の変化として、よく行く場所の数、在宅時間、外出頻度、実生活での交流友人数、趣味の程度に着目した。表8から読み取れるように、ネット利用度と変化の認識との間に明確な関係は確認されなかった。その関係を示すには更なる分

表8 聞き取り調査の回答者の属性とネット利用による変化の認識

回答者番号	性別	学科 <sup>1)</sup>	住まい	居住地	主たる交通手段 <sup>2)</sup>	平日利用時間(時間)	休日利用時間(時間)	継続利用サービス数	発信サービス数	ネット利用度	ネット利用度分類	よく行く場所数	よく行く場所の平均距離(km)	よく行く場所の最遠距離(km)	ネット利用による変化の認識 <sup>3)</sup>					
															包括行動圏	生活行動圏	よく行く場所数	在宅時間	外出頻度	実生活の友人数
1	女	建	下宿	T市	バイク	1~2	2~4	3	0	-3.05	L	8	3.37	18.63						
2	女	建	下宿	T市	自転車	1~2	1~2	2	2	-2.86	L	9	3.22	14.30						
3	女	材	下宿	T市	自転車	1~2	1~2	3	2	-2.45	L	3	0.63	1.12						
4	男	情	実家	T市	車	2~4	4~6	2	0	-1.91	L	7	5.08	7.18						
5	男	建	下宿	T市	バイク	2~4	2~4	3	1	-1.56	M	8	1.39	4.97						
6	男	建	下宿	T市	バイク	2~4	4~6	2	1	-1.24	M	6	1.83	4.08						
7	男	情	下宿	T市	自転車	4~6	2~4	2	1	-1.15	M	3	2.81	3.03						
8	男	建	下宿	T市	自転車	4~6	6~8	1	0	-0.77	M	22	2.65	5.83						
9	男	材	下宿	T市	自転車	2~4	4~6	3	2	-0.16	M	6	2.14	3.40						
10	男	情	実家	県外	バイク	2~4	4~6	5	1	-0.01	M	6	-	-						
11	男	建	下宿	T市	自転車	4~6	4~6	5	1	0.82	M	8	2.24	3.98						
12	男	建	下宿	T市	バイク	6~8	1~2	5	2	0.85	M	10	2.95	11.00						
13	男	情	下宿	T市	自転車	4~6	4~6	4	2	1.07	M	15	3.09	4.41						
14	男	情	実家	T市	車	6~8	6~8	3	1	1.55	H	4	4.48	6.65						
15	男	情	寮	T市	自転車	2~4	4~6	5	3	1.58	H	3	5.60	6.31						
16	男	建	下宿	T市	バイク	8以上	8以上	1	0	1.61	H	4	1.50	3.18						
17	男	情	下宿	T市	自転車	4~6	6~8	6	2	2.63	H	14	1.98	5.16						
18	男	建	下宿	T市	自転車	6~8	8以上	6	3	5.10	H	6	2.54	6.50						
19	男	情	その他	T市外	バイク	8以上	8以上	4	3	5.10	H	13	9.24	23.70						
20	男	情	下宿	T市	自転車	8以上	6~8	6	3	5.19	H	7	2.18	3.65						
21	男	情	下宿	T市	バイク	8以上	8以上	5	5	6.60	H	7	1.91	3.02						

1)「建」は建設系、「材」は材料系、「情」は情報電子系を示す。2)バイクには原付も含む。3)■は拡大・増加、■は縮小・減少、□はどちらともいえない

析を要するため、ネット利用度別の変化に対する認識については本稿では示すことができず、今後の課題とする。表9に行動圏および生活に変化をあたえたネット・サービスについて示す。以下、「」内の記述は回答者の発言の要約、[]内の数字は回答者番号を示す。

### 5.1 行動圏 (表8, 9)

9名の回答者(全体の約43%)がネット利用により包括行動圏が拡大したと認識している。その理由としては、「ネットにより今まで行ったことのない場所の存在を知ったり、行く前に場所のことを調べる。それがいつもの行動圏と離れて立地することがある」という理由がほぼすべての回答者からあげられた。その場所として、飲食店、小売店舗、病院、娯楽施設、イベント会場などがあげられた。変化させたサービスとしては、ロコミ情報サイト(5名)、地図検索サイト(3名)、場所の公式ホームページ(3名)といった直接的に場所の情報を得るものに加え、マイクロブログ(4名)、SNS(2名)、チャット(2名)といったネット上の交流によるものがあげられた。「ツイッター上で勧められ、関心を持ち、新たな場所に行くことがある[20, 21]」、「先輩のミクシィで競馬に関心を持ち、自分も行くようになった[11]」といったように、その情報は場所に関するものだけではなく場所に行く動機となるモノ・コトが含まれる。一方、縮小・減少を認識する回答者は1名みられ、「オンラインショッピングがあるので遠くまで買い物に行かなくなった[4]」ことを理由としてあげた。

一方、生活行動圏に対しては、5名の回答者(全体の約24%)が拡大したと認識している。その理由や変化させたサービスとしては包括行動圏と同様のものがあげられた。しかし、「いつも通る道から1本ずれた場所にあるパン屋をネットで見つけ、行きやすいしおいしいので、今では毎週行く[2]」というように、よく行く場所になるためには、行きやすさと場所の魅力の条件を兼ね備える必要があり、それはたまに行く場所に対する条件より厳しいと推察される。また、「ネット利用により行く場所は増えたが、それらはいつもの行動圏内にあることが多い[5, 12]」という意見からは、ネット利用が行動圏を地理的には広げなくとも行く場所の多様性を高める可能性がうかがえる。生活行動圏が縮小したと認識する回答者はいなかった。

いずれの行動圏に対しても「どちらともいえない」とする回答者が過半数を占める。しかし、縮小よりも拡大を認識する回答者が多いことは、ネット利用が行動圏が拡大させる可能性を示唆している。

### 5.2 在宅時間 (表8, 9)

9名の回答者(全体の約43%)の回答者がネット利用により在宅時間が増加したと認識している。変化させたサービスとしては、動画配信サイト(6名)やマイクロ

表9 行動圏および生活を変化させたネットサービス

	包括行動圏が拡大	包括行動圏が縮小	生活行動圏が拡大	在宅時間が増加	外出頻度が増加	外出頻度が減少	実生活の交流人数が増加	趣味の程度が深化
変化を認識する回答者数	9	1	5	9	5	4	6	15
変化させたネットサービス	チャット	2	0	1	2	0	1	2
	マイクロブログ	4	0	2	4	2	1	5
	ブログ	1	0	1	3	3	1	1
	SNS	2	0	2	2	1	0	4
	掲示板	0	0	0	2	0	1	0
	ロコミ情報サイト	5	0	2	1	4	0	0
	オンラインショッピング	0	1	0	0	0	1	0
	オンライン予約サイト	0	0	0	0	0	0	0
	動画配信サイト	1	0	0	6	0	2	0
	オンラインゲーム	0	0	0	2	0	1	1
	サーチエンジン	2	0	1	0	1	0	0
	場所のホームページ	3	0	3	0	4	0	0
	地図検索サイト	3	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	2	0	1	0

ブログ(4名)が比較的多くあげられた。理由としては、「つついネットを時間を費やしてしまう[4, 9, 15, 17, 19]」、「出かけなくとも自宅で交流や娯楽ができる[10, 11, 14, 18]」のいずれかがすべての回答者からあげられた。「家でのネット利用に時間を取られるので、遠出しなくなった[17]」というように在宅時間の増加が包括行動圏の減少につながる可能性を示唆した回答者1名以外には、在宅時間の変化による行動圏に対する影響は認識されていない。

### 5.3 外出頻度 (表8, 9)

外出頻度は5名が増加、4名が減少したと認識しており、本稿で着目した生活上の変化のなかで唯一相反する変化が同等に認識されている。増加を認識する回答者は全員ネットを外出のための情報源として位置づけている。一方、減少を認識する回答者からはその理由として「家で十分楽しめる[9, 18]」といった在宅行為の充実に加え、「ぶらぶらする無目的な外出が減った[18]」といったネット利用が外出の目的の明確化、外出の効率向上につながることで複数の回答者より指摘された[2, 18, 19]。

外出頻度が増加したと認識する回答者5名中4名はいずれかの行動圏の拡大を認識している。外出頻度の増加に示唆される現実空間での活動の活発化は行動圏の拡大に間接的な影響を与える可能性があると考えられる。

### 5.4 実生活で交流する人数 (表8, 9)

6名の回答者(全体の約29%)が実生活で交流する人数が増加したと認識している。増加させたサービスとして、マイクロブログ(5名)、SNS(4名)が多くあげられた。「ツイッターでの交流を契機に、話したことがないクラスメートと実際に話すようになった[4, 17]」、「ミクシィで中学の同級生を見つけ、同窓会をした[3]」といったように、ネットがもともと知っていた人との交流の契機となったという事例が大半である。一事例ではあるが、「ミクシィのバイクコミュニティで知り合った仲間達とたまに集まる。それにより行動圏は拡大した[19]」というネットが実生活で交流する人数を増加させ、それが包

括行動圏の拡大につながった事例がみられた。その他の回答者はネットを契機とする実生活での交流の変化が行動圏に影響を与えたとは認識していない。また、ネット上で知り合った人と実際に出会う事例は少なく、その理由として相手が遠方に居住していることやネット上の付き合いと割り切っていることなどがあげられた。

### 5.5 趣味の程度 (表 8, 9)

15名の回答者(全体の約71%)が趣味の程度が深まったと認識しており、例示した項目のうち最も多くの回答者が変化を認識している。変化させたサービスとして、マイクロブログ(7名)、動画配信サイト(6名)、ブログ(5名)、SNS(5名)が比較的多くあげられた。その理由としては、趣味に関する情報が得やすいことだけでなく、「ツイッターで薦められ、音楽のジャンルが広がった[17]」、「イラスト投稿サイトで、自身のイラストに対する反応・評価があり、モチベーションがあがる[21]」というようにネット上の交流によるものもあげられた。深まった趣味としては、プログラミング、ゲーム、マージャン、アニメ、音楽、映画、読書、楽器、北欧デザイン、スポーツ、旅行、バイク、自転車など、ネット回線を要するものから要しないアウトドアまで多岐にわたる。ネットにより深まった趣味が実際に行動圏を拡大させたと明確に認識している回答者は3名[1, 19, 21]と多くはない。しかし、明確な認識はなくとも、これらの趣味が外出を伴ったり、現実空間での活動を活発化することにより、行動圏が拡大する可能性はあると考えられる。

## 6. おわりに

本稿の主たる成果を以下に示す。

1) 質問紙調査結果より、ネット利用の程度を便宜的に3段階に分けると中程度、低程度、高程度の順で行動圏が大きい可能性が確認された。しかし、ネット利用が行動圏に影響を与えるのか、それともそもそも行動圏が広い(狭い)人がネット利用を好む(嫌う)のかといった因果関係の向きは特定できない。因果関係の双方の向きを仮定すると、以下の仮説が構築される。

・ネット利用はある程度までは行動圏を拓げる効果を持つが、ネット利用の程度があるレベルを超えると逆に行動圏を狭める効果を持つ。

・行動圏が広い学生は現実空間と仮想空間の両方に関心がありネットを適度に使う(中程度)。行動圏が狭い学生は、両空間に関心がない(低程度)、もしくは仮想空間への関心が強い(高程度)。

2) 聞き取り調査により、ネット利用とそれによる行動圏や生活上の変化の認識の多様性が明らかになった。ネット利用により行動圏が広がったと認識する回答者が一定数存在するが、拡大縮小のいずれの認識もない回答者の方が多い。明確に認識している回答者は少ないが、趣味の深まりといった現実空間での活動の活発さにつながる

ネット利用による生活上の変化が行動圏に影響を与える可能性が示唆された。

本稿ではネット利用を一元的に捉えたが、ネットサービスやモバイル機器の利用特性を踏まえ、ネット利用の実態を仔細に捉えた上で本稿で得られた仮説を検証することが今後の課題である。また、行動圏を距離と場所数だけで捉えるのではなく、その場所での行動の質や交流を明らかにし行動圏の変化の意味・意義を合わせて論ずることが重要だと考える。調査対象者を大学生以外の年代や都市圏の大学生に拓げることとも今後の課題である。

### 【注釈】

- 注1) 1時間未満(1点)、1時間以上2時間未満(2点)、2時間以上4時間未満(3点)、4時間以上6時間未満(4点)、6時間以上8時間未満(5点)、8時間以上(6点)で得点化。  
注2) 表4に示す10種のネットサービスのうち、月に数日以上頻度で利用するサービス数。回答者の平均は4.36サービス、最小値0、最大値10、標準偏差値は2.47である。  
注3) 表4に示す双方向の利用が可能だが発信しなくても利用できる7種のネットサービスのうち、自らが情報発信するサービス数。回答者の平均は1.34サービス、最小値0、最大値7、標準偏差値は1.58である。  
注4) ネット利用に関する回答にはモバイル機器によるものも含むと思われるが、モバイル機器による細切れの利用時間を正確にカウントすることは困難と思われる。そのため、本研究のネット利用時間は、回答者の主観的かつ感覚的なものであることに留意が必要である。

### 【参考文献】

- 1) 牟田武生: ネット依存の恐怖—ひきこもり・キレる人間をつくるインターネットの落とし穴, 教育出版, 2004
- 2) 芦崎治: ネットゲル人, リーダースノート, 2004
- 3) 平井大祐, 葛西真記子: オンラインゲームへの依存傾向が引き起こす心理臨床的課題, 日本心理臨床学会, 心理臨床学研究, 24(4), pp. 430-441, 2006
- 4) 高木史朗, 藤井聡: インターネット利用と生活圏域の拓がりに関する研究, 交通工学, Vol. 42, pp. 62-68, 2007
- 5) 遠藤薫: 青少年は新しいインターネットサービスをどのように利用しているか, 第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告, pp. 207-220, 2007
- 6) 伊丹絵美子, 垂水浩幸, 小林一智, 中島美登子: 大学生のインターネット利用と生活行動圏との関係, 情報処理学会研究報告, グループウェアとネットワークサービス, 2011-GN-81(16), pp. 1-8, 2011.9
- 7) Emiko Itami, Hiroyuki Tarumi, Kazutoshi Kobayashi, Mitoko Nakashima: Internet Usage and Real World Activities -Who is Socially Withdrawn?, IDIS International Conference ICT, Society and Human Beings 2011, pp. 43-50, 2011.7
- 8) 伊丹絵美子, 小林一智, 中島美登子, 垂水浩幸: インターネット利用が生活行動や地域施設利用に及ぼす影響—香川大学工学部に通う大学生を対象として—, 日本建築学会地域施設計画研究, Vol. 29, pp. 81-86, 2011.7

\*1 大阪大学大学院工学研究科, 特任研究員, 博士(工学)

\*2 香川大学工学部, 教授, 工学博士

\*3 岡山県, 修士(工学)

\*4 香川大学工学部, 講師, 博士(工学)

# **A Relation between Internet Usage and the Spatial Range of Activities in Daily lives of University Students**

**-The case study of engineering university students commuting the local suburb's campus-**

○Emiko ITAM\*<sup>1</sup>  
Hiroyuki TARUMI\*<sup>2</sup>  
Kazutoshi KOBAYASHI\*<sup>3</sup>  
Mitoko NAKASHIMA\*<sup>4</sup>

Keywords : Spatial range of activity, Internet Usage, University Student

This paper aims at clarifying the correlation between internet usage and the spatial range of activities in daily lives. Questionnaire survey and interview survey were conducted on university students who commute campus of local city suburbs. 157 samples from questionnaire survey and 21 samples from interview survey were used for analysis. The following results are obtained;

- 1) From the questionnaire survey, the relation between actual spatial range of activity in daily lives and the internet usage was partially confirmed. As an index of actual range of activity, the number and the average and the longest distance from house of frequent visited places were used. As an index of the internet usage including mobile usage, the time for using internet in weekday and in weekend, the numbers of continually using internet service and the number of interactively using internet service were used. The possibility that the ranges of activities in daily lives of the middle level internet users tend to be wider than that of high level and low level internet users were confirmed. But the relation of cause and effect could not be determined. With assuming the both direction of cause and effect, the following two hypothesis are defined;
  - Using internet to some extent may cause to widen the spatial range of activity. But if person uses internet beyond some extent, internet cause to narrow the range of activity.
  - The students having wide range of activity may be interested in both real space and virtual internet space. They uses internet to some extent.
- 2) From the interview survey, the students' recognition of the change in life caused by using internet was clarified. Some students recognize that the range of activity become wider because of using internet. They get information about the place and the motive for visiting place through internet including communication with interactive internet service. But more than half of students do not recognize any changes of the range of activity because of using internet. The changes in life caused by using internet are diverse showing below examples;
  - Nearly half of students recognize that the time of staying home get longer because of using internet. But most of them do not recognize that staying home longer cause to change the spatial range of activity.
  - About frequency of going out, nearly same number of students have opposite recognition. The students recognizing that the frequency get higher use internet for getting information about real life. They recognize that the high frequency of going out causes to widen the spatial range of activity. On the other hand, some students pointed out that the frequency get low because internet make the going out more purpose oriented and efficient.
  - Nearly 70% of students realized that the level of hobby have been deeper because of using internet. The hobbies changed by internet are variety and they are not only the hobby which need the internet. Only three students recognize that hobby makes the spatial range of activity wider.

---

\*1 Specially Appointed Researcher, Graduate School of Eng., Osaka Univ. , Dr. Eng.

\*2 Professor, Faculty of Eng., Kagawa Univ., Dr. Eng.

\*3 Okayama Prefecture, M. Eng.

\*4 Lecturer, Faculty of Eng., Kagawa Univ., Dr. Eng.